5歳児の事例　目 次

4月
事例 1 「おたまじゃくしは何を食べるのかな」…… P 29
事例 2 「ヒナノちゃんありがとう」…… P 30
5月
事例 3 「そっちから風が吹いてくるから転がってくれないよ」…… P 31
事例 4 「うん、ぼく、虫が好きだもん！」…… P 32
事例 5 「ヤゴのえさは、オタマジャクシ！？」…… P 33
事例 6 「お母さん、白いお花好きでしょ」…… P 34
事例 7 「そうだ、切ればいいんだよ」…… P 35
事例 8 「この間はぼくの手ぐらいだったのに」…… P 36
6月
事例 9 「あ、黄色いテントウムシ発見！」…… P 37
事例 10 「明日はイングランドの旗で応援してもらうの」…… P 38
事例 11 「虫のことなら何でも知ってるよ！」…… P 39
事例 12 「年長だからひとり２０回にしようよ」…… P 40
事例 13 「今の『なし』ね、もう一回ね」…… P 41
事例 14 「今日はハルちゃんの誕生日にしよう」…… P 42
事例 15 「ぼくにも見せて」…… P 43
事例 16 「エー、ぼくチャンピオンだったのにな…」…… P 44
事例 17 「もっと高くするのはどう？」…… P 45
事例 18 「こっちが高い」「こっちが深い」…… P 46
事例 19 「学校の勉強したみたい」…… P 47
7月
事例 20 「穴をあけて、これ入れるから」…… P 48
事例 21 「たんけんごっこしようよ」「じゃあ、この地図…」…… P 49
事例 22 「ぼくの作った砂時計は何分か教えて」…… P 50
事例 23 「そうさ、ヘラクレスオオカブトだよ」…… P 51
事例 24 「不思議！だんだん染み込んでいく」…… P 52
事例 25 「洗濯機から出したら軽くなってた」…… P 53
事例 26 「すごい！水車が回った！」…… P 54
9月
事例 27 「これ、日本の旗と模様は同じでも色が違う」…… P 55
事例 28 「『お茶熱いですから気をつけて』っていうのはどう？」…… P 56
事例 29 「…じゃあ誰のハンカチなの」…… P 57
10月
事例 30 「先生、ミサト、なわとび上手になったよ」…… P 58
事例 31 「この位で遊んだほうがいいよ。間に合わなくなるもん」…… P 59
事例 32 「あれ！真っ黒。どうして？」…… P 60
事例 33 「アキちゃんは速いからアキちゃんでどう？」…… P 61
事例 34 「先生と一緒なら跳べるんだけどな」…… P 62
11月
事例 35 「そうか！もしかしてお風呂の時とおんなじ？」…… P 63
事例 36 「綱引きをしたいけど」…… P 64
事例 37 「人間の分けっこだね。算数の勉強みたい」…… P 65
12月
事例 38 「１つ残ったから最後は６個にしよう」…… P 66
事例 39 「歌いながら鳴らしたら気持ちがそろうかな？」…… P 67
事例 40 「やっと冬が来たんじゃない」…… P 68
2月
事例 41 「お母さんザリガニと同じ形だ！」…… P 69
事例 42 「今の上手だったよ」…… P 70
事例 43 「どっちも凍らない。なんで？」…… P 71

4月 おたまじゃくしは何を食べるのかな

自然体験　情報収集

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園の池・保育室　＊時期：4月中旬

事　例　：1

5歳児のモトキは、園庭の隅の池でおたまじゃくし捕りに夢中です。捕ってきたおたまじゃくしを容器に入れて、大切に保育室まで持ち帰ってきました。モトキは中をのぞき、「1，2，3…」と数を数え、友だちのチヒロに数を知らせています。

モトキは「先生、おたまじゃくしは何を食べるのかな。ぼく、飼いたいな」と言います。担任は「何を食べるんだろうね。この本に載っているかな」と図鑑を示します。

チヒロとモトキは図鑑を広げて夢中で知りたい情報を探し始めました。該当ページを見つけたチヒロは絵を見て、「かつおぶしとパンだって」と大声を上げ、そばにいたモトキは「ご・は・ん・つ・ぶ、ごはんつぶだ～」と担任に伝えています。

チヒロ「今あげるものがないよ」

担任　「みんなの今日のお弁当は何？」

モトキ「あ！おにぎりのごはんがある」

お昼のお弁当の時間になったらあげることにしました。

気付きや経験した事柄

・生物への愛着

・物と数の対応

◆教師の意図
情報を調べる方法（図鑑など）へ誘導したい

・情報の活用
・文字から内容を理解する
・情報を言葉で伝える
・「分かること」の喜び

◆教師の意図
視野を広げたい

・助言の意味の理解
・自分たちと同じものを食べる生物への愛着
・感動の共感

4月 ヒナノちゃんありがとう

コミュニケーション（言葉と行動の思いやり）

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園保育室　＊時期：4月下旬

事　例　：2

お弁当の後、ヒナノはコウキのイスの下にごはん粒が落ちているのに気が付きました。

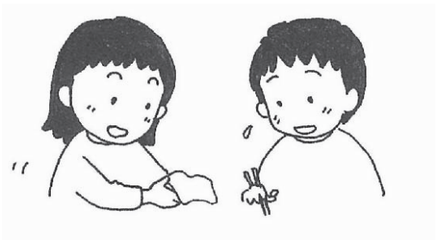
ヒナノの様子に気が付いた担任は、ヒナノに「コウキちゃんに教えてあげてね」と言うと、ヒナノはイスの下を指差しながら、コウキに「ごはん粒が落ちているよ」と知らせました。

コウキはどうしたらいいのか分からない様子で首をかしげています。すると、ヒナノは自分のポケットからティシュを1枚取り出すと、コウキに手渡しました。コウキはそのティシュを受け取ると、自分でごはん粒を拾いました。

担任　「コウキくん、教えてもらってよかったね」

コウキ「うん、ヒナノちゃん、ありがとう」

ヒナノは少し照れくさそうに笑いました。



気付きや経験した事柄

・友達の状態に気付く

◆教師の意図
気付いたことを行動に移してほしい（道徳的実践力）

・やさしさや親切を行動にする
・相手への思いやり

・相手の状態の理解
・具体的なサポートの工夫

◆教師の意図
自分にとって他の人の存在の必要性に気付いてほしい

・感謝される喜びの実感

5月 そっちから風が吹いてくるから転がってくれないよ

自然現象の体験（風や雲の観察）

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園園庭　＊時期：5月

事　例　：3

風がとても強い日。園庭にいた子どもたちは、自分が強風に押されて動かされることに「きゃあー」と声をあげて大喜びです。砂場用のバケツが風で転がっていくのを「きゃあーきゃあー」言いながら楽しそうに追いかけます。

担任は固い紙を筒状に丸めて転がしてみせました。風に押されてころころ転がっていくその動きに興味をもった子どもたちは、自分たちも作りたいと言い、好きな色を選んで作り、転がし始めました。

何度も転がして遊んでいるうちに、子どもたちは自分で気が付いたいろいろなことをそれぞれに言い始めました。

ユウキ「そっちに転がしたいけど、そっちから風が吹いているからそっちに転がってくれないよ」

カオル「風って力持ちなんだね」

ユウキ（空を見上げ）「わあ、雲がすごく速く動いてる」

クミ　「雲に乗って天まで行きたいな～」

カオル「あっちのほうに雲が流れているね」

コウキ「こっちから風が吹いているからじゃない」

気付きや経験した事柄

・日常生活の中での、自然現象を体感する

◆教師の意図
・風の方向や強さなどを感じ取ってほしい
・自分たちで作って楽しむなど活動を広げてほしい

・体験の楽しさと道具作りの工夫

・体験を通した気付き

・風に方向があることを知る

・風力の実感
・雲の動きの変化への気付き
・自然（雲の速さ）に感動

・風の強さ、方向と物の動きとの関係の推測と理解

5月

うん、ぼく、虫が好きだもん！

昆虫の観察（図鑑の活用）

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園保育室　＊時期：5月

事　例　：4

幼稚園の畑で虫探しをしていた5人の男児が、テントウムシを捕まえて保育室に戻ってきました。テントウムシを飼育ケースに入れると、モトキは図鑑を取り出してとても熱心に見ていましたが、しばらくすると…

モトキ「先生、このテントウムシ、カメノコテントウって言うんだよ」

担任　「どうして分かったの？」

モトキ「ほら、黒くて赤の形で描いてあるでしょ」

担任が飼育ケースをのぞき込むと、テントウムシは確かに黒地に赤い模様でした。モトキは図鑑に載っているたくさんの種類のテントウムシの中から、同じ模様をしたテントウムシを指差しました。

担任　「本当だ。カメノコテントウだ。モトキくん、すごいね」

モトキ「うん。ぼく、虫が好きだもん！」

モトキは嬉しそうな顔をして、少し得意げでした。

気付きや経験した事柄

・詳しく知る方法の獲得

・図鑑と実物の比較

・個々の昆虫の特徴の把握と判断

◆教師の意図
子ども自身で（自発的に）調べた行為への承認

・自分で調べて分かった喜び

5月

ヤゴのえさは、オタマジャクシ！？

生命の大切さへの気付き　自然界の輪廻

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園保育室（学級全体での活動の場）　＊時期：5月

事　例　：5

イツキとリョウは幼稚園の池でヤゴを捕まえ、飼うために図鑑でヤゴのエサを調べました。ヤゴがオタマジャクシを食べることを知ったリョウは、保育室で飼っているオタマジャクシの水槽のところにやってきて、水槽の中にヤゴを入れようとしました。すると、オタマジャクシを捕まえたヒロハルに「オタマジャクシがかわいそう」と反対され、リョウは考え込んでしまいました。

担任はこの問題を学級で話し合うことにしました。

「オタマジャクシが食べられちゃうのはかわいそう」

「でも、ヤゴがトンボになるのを見たい」

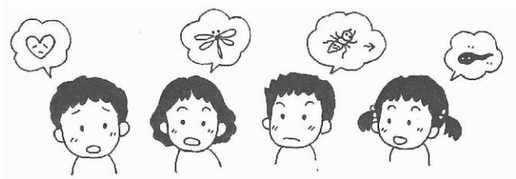
「ヤゴはお池に放してあげたほうがいい」

「オタマジャクシを半分だけあげればいい」

一人ひとりが一番いい方法を探して、話し合いが続きます。

〈結論〉

ヤゴがトンボになるところは見られないが、池に放すことにしました。



気付きや経験した事柄

・知らないことを調べる方法（図鑑の活用など）

・学習方法の習得

・（自分とは違う）他人の意見があることを理解する

・生命の大切さ

・思いを実現するための試行錯誤

◆教師の意図
・お互いの思いや考えを出し合う中で、相手の気持ちを知り、友だちと一緒に試行錯誤してほしい
・しかし、保育室においてもいつトンボになるかわからないというヒントも提示する

5月

お母さん、白いお花好きでしょ

大切な人への感謝の気持ち

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園・家庭　★時期：5月上旬

事　例　：6

明後日は母の日です。幼稚園で、母のためのプレゼントを作ることになり、キョウスケは担任が実現可能なものとしていくつかあげた中から、お花のアレンジメントを選びました。はさみとかごを持って裏庭に行き、切ってもよいと言われている花壇の花を何種類か切ると、担任が用意したオアシス入りの容器に差し始めました。白いノースポールとピンクのゼラニウムを中心にみやこわすれを3本ほどあしらったものが出来上がりました。担任にラッピングしてもらいながら「素敵！お母さん喜ぶよ」と言われ、嬉しそうでした。

降園時、作品を紙袋に入れ大事そうに持って保育室から出て行くと、迎えに来た母親に「それなあに？」と言われますが「ないしょ」と言っていました。

（以下は母親からの情報）

父親も帰宅し、家族で夕食を始めようとした時、キョウスケが「おかあさん、いつもありがとう」と言ってアレンジメントを差し出しました。母は「まあ素敵！ありがとう。さっきのないしょこれだったの？」と嬉しそうです。

父親　「ほう！素敵な色合いだね」

キョウスケ「うん、お母さん、白いお花好きでしょ」

母親　「そうなの。どうして分かったの？」

キョウスケ「ずっと前、そう言ってたもん」

父親　「よく覚えていたな。お父さん知らなかったよ」

その日の夕食は会話がはずみ、いつもにも増して和やかなものになりました。

気付きや経験した事柄

◆教師の意図

一律に同じものでなく、一人ひとりが自分の母親のことを考えて、相手の喜ぶものをプレゼントしてほしい

・母の好きなものが分かる
・母への感謝の気持ち、愛情
・思うようにできた満足感
・色彩感覚、自然の素材の取り入れ
・賞賛の喜び

・母が喜ぶことへの期待
・ワクワクする気持ち

・母への感謝の気持ち
・母の気持ち
　→嬉しさと我が子の成長の喜び

・有能感
・母親の好みの理解、役立ち感

・経験の記憶と必要に応じた想起
・父の存在
　→子の姿の認め、賞賛

・温かい家族、存在感

5月

そうだ、切ればいいんだよ

課題解決の工夫

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園保育室　★時期：5月上旬

事　例　：7

子どもたちは園内で栽培するイチゴを毎日観察し、赤くなるのをとても楽しみにしていました。ある日、10粒ほどが赤くなっていましたので、お弁当の時間にデザートとしてみんなで食べることにしましたが、残念ながらイチゴの数が人数分ありません。

担任　「困ったわね。全員の分、イチゴがないわ」

ダイキ　「…う～ん、そうだ！切ればいいんだよ。」
（イチゴの大きさを見比べて、指を差しながら）
「これは大きいから5等分でしょ。こっちは3等分、小さいのはこのままでいいよね」

担任　「5等分とか3等分とか、難しい言葉を知っているのね。どういうこと？」

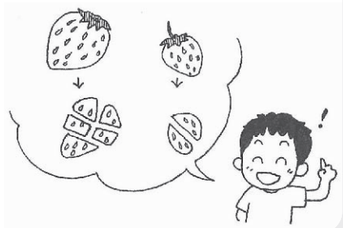
ダイキ　「これはね、大きいから5つに分けると一番小さいのと同じになるし、これは3つに分ければいいかなと思うの」

担任　「なるほど、みんなどう？ダイキくんが言ったことわかったかな？どうする？」

園児たち「うん。それがいいよ」

全部のイチゴを一律に半分に切る（2等分する）のではなく、その大きさによって等分する数を変える方法に、子どもたちは納得したようです。それぞれ何等分するか考えながら切ると、ほとんど同じ大きさになりました。

ほんの一口ですが、みんなで分け合って食べたイチゴの味は格別においしいものでした。



気付きや経験した事柄

◆教師の意図

順番にするなり切るなり、自分たちで決めてほしい

・大きさの差異に関する気付き
・課題（数の不足をどうするか、大きさの差異をどうするか）を解決するための思考や工夫
　↓
・等分に分ける必要性
・等分になる予測と確認

・納得と安心感、満足感

5月

この間はぼくの手ぐらいだったのに

自然体験　植物の生長への驚き　栽培物とのかかわり

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園園庭　★時期：5月下旬～6月上旬

事　例　：8

　学級で野菜の苗や種を植え、水やりは順番にすることにしました。ある日、水やりをしようとしたヒロシは、芽が出てきていたとうもろこしを見て、驚いた様子で担任に話しかけました。

ヒロシ「うわー、とうもろこしがでっかい！」

担任　「本当だね。いつの間にか大きくなったね」

ヒロシ「すごい！すごい！」

担任　「ヒロシ君の手ぐらいの大きさかな？」

（ヒロシは自分の手のひらと比較しながら）

ヒロシ「うん。ぼくの手よりちょっと大きいくらい」

　その後、適度に雨も降り、とうもろこしはどんどんと生長していきました。しばらくしてまた、ヒロシの水やりの当番がまわってきました。ヒロシは水をやりながら、

ヒロシ「えっ！？先生、これってとうもろこし？」

担任　「そうだよ。また大きくなっているね」

ヒロシ「この間はぼくの手ぐらいだったのに…」

担任　「今日はどのくらいの大きさになっている？」

（ヒロシはとうもろこしと背比べをしながら、自分の足の付け根を指差し）

ヒロシ「う～ん、今日はこのくらい」

　その後も、ヒロシは水をやるたびに、とうもろこしと背比べをするようになりました。

気付きや経験した事柄

・身近な植物の生長への気付き、驚き、実感
※自然への興味や関心の発端

◆教師の意図
具体的な長さや大きさを比較することで、植物の成長速度への興味がより膨らんでほしい

・自分の身体をモノサシにして測り、長さを実感する
・経験との比較（経験の活用）

・植物の生長への期待、興味

6月

あ、黄色いテントウムシ発見！

生物の成長過程の実体験

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園保育室　★時期：6月

事　例　：9

　幼児たちは畑からテントウムシの幼虫をたくさん捕ってきて、飼育ケースで育てています。ある日、ケースをのぞき込んでいたカイトが大声をあげました。

カイト「あっ！黄色いテントウムシ、発見！」

タカヤ「本当だ。カイトくんが捕ってきたの？」

カイト「ううん、違うよ。誰が入れたんだろう？」

担任　「ほんとだね。幼虫がたくさんついていたはずなのにね」

　数日後、飼育ケースの中がニジュウヤホシテントウでいっぱいになっていました。

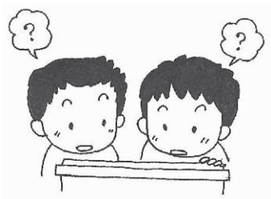
カイト（不思議そうに）「え～っ、誰が捕ってきたの？」

モトキ「どうしてニジュウヤがいるのかな～？」

カイト「…あっ！分かった。幼虫がニジュウヤになったんだよ。（飼育ケースの中でサナギになっている、下半分が黄色の幼虫を見つけると）ほら、これがもうすぐ黄色テントウになるんじゃない？」

モトキ「そうか！そうだね！」

　カイトは広げた図鑑のニジュウヤホシテントウのページをのぞき込みながら、ニジュウヤテントウの幼虫から成長の過程（幼虫→さなぎ→黄色いテントウムシ→成虫）を指差しながら見ています。担任が「幼虫が黄色いテントウムシになって、それがニジュウヤになったんだね」と言うと、カイトは嬉しそうにうなずいていました。



気付きや経験した事柄

・生物の変化に気付く観察力
・自分で変化に気付いた喜び

・分からないことや疑問を解明したい欲求

・観察の結果と経験からの予測
・観察する力

・経験に基づいた洞察力

・調べて知ろうとする知的好奇心
・疑問を解決した喜び
・予測が合っていたことの喜び

6月

明日はイングランドの旗で応援してもらうの

国際理解（外国への興味）

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園園庭　＊時期：6月

事　例　：10

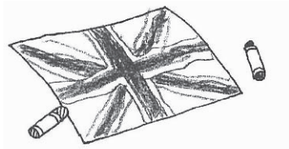
最近は幼児の中でもサッカーへの興味が高まって、「日本が勝った」など、試合の結果が話題になります。

園庭でサッカーをするときも、「イングランドになりたい人、フランスになりたい人…」と聞いて、チームに分かれて遊んでいます。この日はイタリアとブラジルのチームになっての対戦です。

徐々に点数にも興味をもつようになり、そばで見ている担任に「今、1対2でイタリアが勝っているよ」と伝えます。そこで担任は点数がわかるようにダンボールで得点版を作りました。

ボールを手で触ると「ハンド」、「イエローカード」という声も聞かれます。足でのボール運びも上手くなってきて、1つのボールをみんなで楽しそうに追いかけています。まだサッカーに参加できない3～4歳児は「フレー、フレー」と声を出しての応援です。

昼食後、シュンスケは、「イングランドの旗を描きたい」と言いだし、担任が世界の国旗が載った図鑑を渡すと、イングランドの旗を描き始めました。担任が理由を聞くと、「明日は（自分が描いた）イングランドの旗を振って応援してもらうの」と言いました。他の幼児も興味をもち、それぞれ自分の応援したい国の旗を描き始めました。



気付きや経験した事柄

・マスコミや周囲の人々の状況や情報のキャッチと、そのことへの興味関心
・国名の理解の広がり

・状況の把握と報告

◆教師の意図
・遊びを通して勝敗や数字への興味をもってほしい
・外国への関心も広めたい

・遊びへの外国語の取り入れ
・遊びを通した運動機能（ボールを足で扱う）、身体能力の向上
・みんなでボールを追いかける楽しさ

・外国の国旗への興味

◆教師の意図
遊び（サッカーや国旗作り）を通して、諸外国に親しみを感じてほしい

6月

虫のことなら何でも知ってるよ！

虫ごとの特性の違いの理解

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園園庭・テラス　＊時期：6月

事　例　：11

ノゾミとソウタはシャベルを持って、木の根元やその周りに穴を掘っています。2人はいろいろなところを歩き回りながら、虫を探しているようです。2人の持っている容器の中は、捕まえた虫たちでいっぱいです。

ノゾミ「これはワラジムシ？」

ソウタ「そう。ダンゴムシはまんまるだもん」

様子を見ていた担任が近づいて、

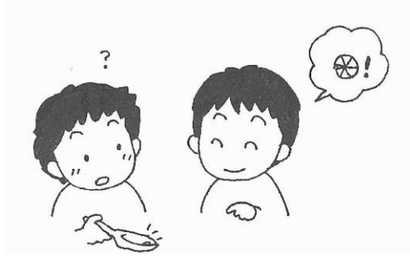
担任　「ねえ、ソウタくん。このダンゴムシは背中に黄色い模様があるけど、こっちのダンゴムシには模様がないよね。どうしてなのかな？」

ソウタ「ぼく、虫のことなら何でも知ってるよ。黒いのがオス、黄色い（模様がある）のはメスだよ」

担任は本棚から『ダンゴムシ』の本を持ってきて確認します。

担任　「本当だね、ソウタくん。こっちがオスで、こっちがメスって書いてあるよ」

担任の感心した顔を見て、ソウタはとても嬉しそうな表情です。ノゾミや周囲の幼児たちが「本当だー」と言いながら、本を見始めました。ノゾミは「これはダンゴムシの赤ちゃん…」と言いながら、本とダンゴムシの実物を見比べています。



気付きや経験した事柄

・自分で探して手に入れる喜び

・虫ごとの特性の違いの理解

◆教師の意図
自分自身で調べ、発見するという楽しさを体験してほしい

・知っていることを伝える誇らしさ

◆教師の意図
確認したり（図鑑の活用の仕方）、承認したりすることにより、他の幼児にも正しく伝わってほしい

・観察（経験）と比較

6月

年長だからひとり20回にしようよ

ルールを守る必要性と大切さ

年齢：5歳児　場面：幼稚園遊戯室　時期：6月

事　例　：12

レミとノゾミが担任と一緒にトランポリンを出してきました。すると、4～5名の幼児が集まってきて、自分たちも入れてほしいと言います。ノゾミはその子どもたちに、「こっちに並んで」と言うと、自分はトランポリンに上がって跳びはじめ、待っている子がいることを忘れたように何回も跳び続けます。

レミが「ノンちゃん、代わってよー」と頼んでも、ノゾミは止めずに跳び続けます。そばで見ていた担任が「ノゾミちゃん、レミちゃんの言ったこと聞こえた？」と問うと、ノゾミはようやく跳ぶのを止めました。

担任　「どうやって交代するか、みんなで相談したらどう？」

リナコ「ノゾミちゃんは、10回だったよ」

ユウガ「年長だから、ひとり20回にしようよ」

レミ　「そうね、それがいいね」

そして全員で、「1，2，3・・・」と数えながら、トランポリンで遊び始めました。

気付きや経験した事柄

・集団での譲り合いの気持ち
・ルールを決めてそれを守る
・自分中心に進めたい気持ち

・交代の必要性と欲求

◆教師の意図
集団生活での譲り合いの気持ち、ルールを決めてそれを守ることの重要性に気付き、それを友だちと守りながら取り組んでほしい

・ルールの必要性の認識
・判断するための事実確認
・自分の判断、意見や考えを伝える
・年長に成長している誇り

・数のカウントの活用
・1対1の対応

6月

今の『なし』ね、もう一回ね

フェアであることの大切さ

年齢：5歳児　場面：幼稚園園庭　時期：6月

事　例　：13

園庭で、ミナミとリナコの2人が、なわとびを片手に向き合って、遊びのルールを決めています。

ミナミ「3回戦だからね。リナコちゃんからだよ。私が数えるから、跳んで」

リナコがなわとびを始めると、

ミナミ「1、2、3、4、…9！リナちゃん、9回。今度は私が跳ぶよ」

リナコ「1、2、3、4、…21！」

ミナミ「ミナミの勝ちだね。じゃあ、次は2回戦ね。今度はミナミから跳ぶよ」

リナコ　「1、2、3、4、…7！」

ミナミは7回で足を引っ掛けてしまいました。

ミナミ「今の『なし』ね。もう1回ね」

跳び直そうとするミナミに向かって担任が、

担任　「ミナミちゃん、残念だったね」

ミナミ「…うん。はい、リナちゃん、跳んでいいよ。1，2，3…27！2回戦はリナちゃんの勝ちね。3回戦やろうよ」

2人はなわとびを続けました。

気付きや経験した事柄

・遊びを通した「ルール」の理解

・動きと数の対応
・跳んだ回数の比較（多・少）

・フェアとアンフェアの違い

◆教師の意図
自分にとって好ましくない（不利な）状況になっても、決めた約束・ルールを守り、それを受け入れるセルフコントロール力を身に付けてほしい

6月

今日はハルちゃんの誕生日にしよう

イマジネーション（空想力）　自然物の活用

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園園庭　★時期：6月

事　例　：14

ハルカ、サカエ、アオイの3人が、園庭ですり鉢やまな板を使って遊び始めようとしていました。担任が「にこにこ通りに草やお花があるから取りに行こうよ」と誘って、ヨモギ、アサツキ、ヒメジオン、マリーゴールド、ベゴニアなど、遊びに使える草花を教えました。

しばらくするとハルカが「お花のケーキができたよ。見に来て！」と担任を呼びに来たので行ってみると、容器に砂・花・葉を飾ってケーキを作り、すり鉢を使って色水を作っていました。

色水作りをしているハルカは、そばできれいな色水を作ったサカエにその方法を尋ね、「水を少しだけにするといいよ」と聞くと、すぐにそのように作り始めました。アオイは木蓮の実を拾ってきて、「これ、包丁で切れるかな？」と言いながら切り始めています。

サカエ「ねえ、今日はハルちゃんの誕生日にしよう！」

アオイ「あっ、じゃあ、誕生日パーティーだね」

サカエの提案で、料理作りがまだまだ続きます。

気付きや経験した事柄

◆教師の意図

日常の遊びの中で、少しでも自然と触れる機会をもってほしい

・自然の草花への興味関心
・いろいろな自然の素材の特徴を学ぶ

・遊びに活かす楽しみ

・素材を工夫するおもしろさ

・知らない方法への興味の追究

・遊びの中でのイメージの広がり
・ヒントをくれた友だちへの感謝
・友達のヒントを生かすおもしろさ

6月

ぼくにも見せて

困難にも挑戦する姿勢

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園保育室　★時期：6月上旬

事　例　：15

年長組では「折り紙のお店屋さんごっこ」が人気です。幼児たちが自分で折った折り紙を品物の代わりにしてお店屋さんを開くのです。折り紙の得意な幼児は、みんながあまり知らない折り方のものを次々と折って、自分のお店に並べています。

あまり折り紙が得意ではないヒロハルは、絵本コーナーで「折り紙の本」を広げて、何かいいものはないか探していますが、なかなか折りたいものが見つかりません。

担任　　「この『恐竜』はどう？」

ヒロハル「（折り方が）難しくてよく分からないよ」

ヒロハルはしばらく折り紙の本をパラパラとめくって考えていましたが、結局、自分が作りなれている『飛行機』を折ることに決めて、折り始めました。

担任はヒロハルの隣に座ると、『クワガタ』や『バッタ』など、まだ比較的やさしいもののページを広げて、ゆっくりと折り紙を始めました。すると、それを見ていたヒロハルは、「ぼくにも見せて」と言って、本をのぞき込みながら、新しい折り方に挑戦し始めました。

気付きや経験した事柄

・必要な知識を手にいれる方法
（図鑑・手引書などの活用）

・自分の能力の判断と回避

・無意識の妥協の習慣

◆教師の意図

・難しいことを避けるのではなく挑戦してほしい
・強制ではなく、自分からかかわってほしい

・図を見ながら折るという経験
・教師をモデルとした自分の挑戦

6月

エー、ぼくチャンピオンだったのにな…

自他の存在の認識　自尊と他尊　チームで競い合うことの理解

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園遊戯室（学級全体での活動）　＊時期：6月中旬

事　例　：16

学級全体でジャンケンカード取りゲームをすることにしました。赤と青チームに別れ、一人ひとりがそれぞれ自分のチームカラーのカードを5枚ずつ持って向かい合って並びます。ルールは相手チームの人とドンをしてジャンケンをし、勝ったら相手のカードをもらうという単純なもので、持っていたチームカラーのカードが無くなったらチーム用の箱から持っていって何回も時間まで参加できるというものです。合図があってゲームが始まると夢中で動いています。

チカラ「ぼく、もうなくなっちゃった」

ツヨシ「もう、5枚取ったよ」

時間になってそれぞれ陣地に戻り、勝ち取った枚数を数えます。担任は「0の人」「1枚の人」と順に個人の成果を聞いていきます。今回は10枚獲得したツヨシがチャンピオンです。

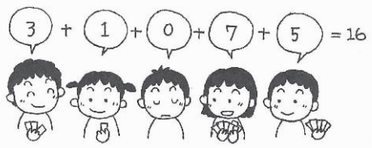
担任　「今日は今までと違ってみんなの分を集めて、赤と青とどっちが多いか比べてみますよ」

中央にカードを対応させて並べていきます。チャンピオンだったツヨシの赤チームが2枚足りません。

ツヨシ「エー！ぼくチャンピオンだったのになぁ」

チカラ「ぼく、2枚しか取れなかったけど勝った」

担任は個人の努力が大切なことはもちろんだが、1人の力だけではチームはだめなこと、チームのメンバーがいることが自分の利益につながることなど、個と集団の関係が分かるように話しました。幼児たちは「よし！今度は…」と意欲的です。何回か繰り返し、この日はトータルで引き分けでした。



気付きや経験した事柄

・ルールの理解と確認

◆教師の意図
繰り返しやってほしい幼児が早く負けてしまうので、休まずに繰り返せる方法にする

・数の確認（物との対応）

・自分の成果の確認

◆教師の意図
・個と集団の関係、チームワークに気付いてほしい
・チームのメンバー一人ひとりが大切な存在であること、協働ということに気付いてほしい

・1対1対応の経験

・チームで活動することの理解

・連帯感と意欲

6月

もっと高くするのはどう？

斜面の角度とスピードの関係性

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園遊戯室　＊時期：6月中旬

事　例　：17

ヒサシ、タケシ、フミヤの3人は大型積み木と板積み木を使って斜面を作り、自分たちで作った車を走らせていました。ところが、スピードが落ちてくると、板と板のつなぎ目でつかえて止まってしまいます。次に上から力を入れて、勢いをつけて走らせると途中から落下してしまいます。様々に試していましたが、

ヒサシ「そうだ、もっと高くするのはどう？」

タケシ「急な坂にするっていうこと？」

フミヤ「そうか、急にすればスピードアップだ」

そこで、3人は積み木を1段増やしてみると、少しスピードが出てつなぎ目は通過するようになりました。すると、斜面をもっと長くしたくなり、板積み木をつなげますが、今度は途中で止まってしまいます。さらに積み木を足して高くすると、急な坂になりすぎてストンと落ちるだけで走りません。

担任は「さっきは成功したのにおかしいね」と言いながら板積み木と床の接点（角度）はどうかということに気付くような助言をした後、途中に支柱を立てると斜度が緩やかになることや、平坦な部分があってまた緩い坂があるとどうなるかなど、試すポイントを提案しました。その後、いろいろ試行錯誤を繰り返していましたが、2段式の斜面を成功させました。

翌日は短時間で作り上げました。後ろから登らせる道や落ちやすい場所に側壁を作り、さらに、回遊できるように工夫し、繰り返し楽しんでいました。

気付きや経験した事柄

・積み木で斜面を構成する力

・なぜ止まってしまうのかの推理
・高低の比較
・高さとスピードの関係の理解
・高いとスピードアップの仮説

・仮説の実証
・更なる期待と意欲
・科学的思考、科学的アプローチの芽生え
・期待の挫折

◆教師の意図
折角始めた遊びを充実させたい、このメンバーでは新たな発想は無理だがヒントがあればできるだろうという期待。加えて緩急の視点も知らせたい。

・共同、協力の必要性と成功の喜びの共感
・経験を生かす
・連続する動きのおもしろさ

6月

「こっちが高い」「こっちが深い」

同じ基準を使って測る

年齢：5歳児　場面：幼稚園砂場　時期：6月下旬

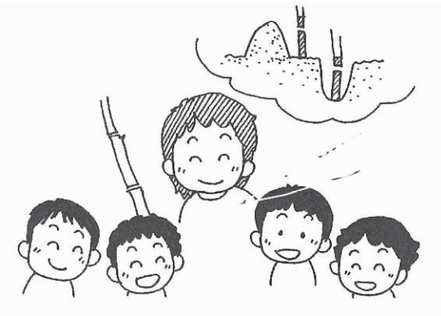
事　例　：18

砂場で山作りをしているイサオとタカシの2人は、山の高さを自分たちの体と比べながら、「膝まで来た」「膝より高くなった」と言いながら、夢中になって山を高くしていきます。その近くでエイジとイチロウは自分たちの掘った穴に手や足を入れては深さを測り、「もっともっと深くして、先生を驚かそう」と言いながら穴を掘り進めています。

そのうち互いに「自分たちの作った山の方が高い」「自分たちの掘った穴のほうが深い」と言い合いを始めました。周囲にいた子どもたちも、この「比べっこ」に参加し、それぞれ自分の体を使って比べては、その感想を言い合います。

子どもたちは担任に状況を説明し、何とか決着をつけたいと訴えます。担任が「どちらも一生懸命にがんばったのだから、（白黒をつけなくても）いいのでは？」と言っても納得しません。

そこで担任は竹の竿を持ってきて、「測る」ということを子どもたちに提案します。その結果、山の高さと穴の深さが同じであることが分かり、4人は大満足。周りの子どもたちも大喜びでした。



気付きや経験した事柄

・自分の体を使って、「高さ」や「深さ」を測る体験

・質の違うものを比較することの難しさ

◆教師の意図

課題を解決する方法の提示

・同じ基準を使って、客観的に「測る」という方法を知る
・お互いを認め合う心地よさ

6月

学校の勉強したみたい

コミュニケーション（言葉と行動の思いやり）　物の数え方

年齢：5歳児　場面：幼稚園園庭　時期：6月下旬

事　例　：19

4歳児の1月末に種芋を植えたジャガイモを掘りました。大小様々なジャガイモがたくさん掘れました。

担任は、○を10ずつ10列書いておいた模造紙を庭に置き、幼児たちにジャガイモをその○に1個ずつ置いていくように伝えました。いっぱいになると別の紙を出すようにしました。

担任は「ずいぶん並んだね。数えてみましょうね」と言い、「もうみんなは年長さんだからいつもみたいに1、2…って数えないよ。ちょっと難しいけど大丈夫かな」と確認し注意が向くようにしました。そして、1列が10個であることを確認し、10、20…と10のかたまりで数えていきました。幼児たちは「すごい、100だ」と感激し、1枚に10個の列が10あり、それで100個であることを理解していきました。100個が3枚と10個の列が6列、そして残りの4個を数え、合わせて364個採れたことが分かり、大感激をしました。

サナエが「先生、1、2、3…って数えると300は大変だけどこうやって数えると早いしおもしろかった」と言い、他の幼児も「学校の勉強したみたい」「足し算って知ってるよ」などと口々に言っていました。

その後、数は364個だけど大きいのや小さいのがあるし、いろいろな形があるので一緒に数えるのはおかしいと言う幼児も出てきて、2～3日はジャガイモをいろいろに分類したり数えたりしました。ジャガイモは全園児で分けて持ち帰ったり園でカレーを作って食べたりして、収穫の楽しさを満喫しました。

気付きや経験した事柄

・収穫の楽しさ

◆教師の意図

収穫物が多いことと数の数え方にもいろいろあること、数の集合などにも関心をもってほしい

・「ちょっと難しい」ことへの興味
・数のかたまり（集合）との出合い
・数の単位の理解

・数の集合の理解

・固体の質の違いの気付き
・同数＝同等ではないという気付きや疑問

・収穫の喜び、充実感

7月

穴をあけて、これ入れるから

自分の考えの実現

年齢：5歳児　場面：幼稚園園庭　時期：7月

事　例　：20

水遊びが盛んになってきたので担任はテラスに、太さの違う透明のホース・ペットボトル・じょうご・大小のカップなどを用意しました。

水遊びの大好きなマサタカはそれを見つけると太さの違う透明のホースをつなげ、ホースの先にじょうごをつけました。そこから水を流し、ホースの中を流れる水の様子をじっと見ては、それを繰り返しています。

しばらくすると、マサタカは担任のところにペットボトルを持ってやってきました。

マサタカ「穴を開けて。これ（ホース）を入れるから」
担任　　「どこに開ければいいの」

マサタカ（ペットボトルの下の方を指差して）「ここ」

マサタカは穴を開けた部分にホースを差し込み、水を入れます。ペットボトルに入れた水がホースを伝わって流れてくる動きを何度も繰り返し、その水の動きをじっと見ています。そして、ペットボトルを持ち上げては、水の流れをじっと見て楽しんでいます。

マサタカはこれらのことを繰り返しながら、水の特性（「水は高いところから低いところへ流れる」）に気が付いたようでした。

気付きや経験した事柄

◆教師の意図
子どもの好きなこと（興味・関心）に合わせ、教材を使って水の性質（水の流れ・動き）など、様々なことに気付いてほしい

・水の流れの観察
・水の流れの不思議さやおもしろさの気付き

・観察からの新しいイメージの広がり
・知的好奇心の育ち

・自分の想像したイメージの確かめ（実験するおもしろさ）

・水の特性の体験的な理解

7月

「たんけんごっこしようよ」「じゃあ、この地図…」

想像力を駆使する楽しさの体験

年齢：5歳児　場面：幼稚園保育室・園庭　時期：7月

事　例　：21

担任は本の表紙に描かれてある探険地図の拡大コピーを子どもたちに見せながら、童話「たんたのたんけん」の読み聞かせをしていました。ある日、「たんたのたんけん」を読んでいた2人の幼児が、壁に張ってある探険地図の拡大コピーを見ながら話をしていました。

アユミ「探険ごっこしようよ」

モモカ「うん。じゃあ、この地図見ながらしよう」

2人は本と地図を見ながら、大型の積み木を並べて、

アユミ「ここは『たんた』の家にしようよ」

モモカ「うん。じゃあ、ジャングルはどっち？」

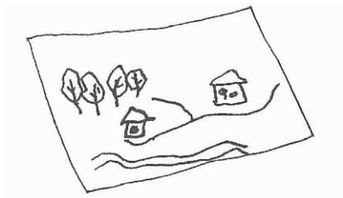
アユミ「えっとね～」

今度はペンと紙を持ち出し、地図を描き始めました。

アユミ「ここが『たんた』の家でしょ。で、お菓子屋さんがあるのがこっちだから…」

モモカ「ジャングルは緑でいっぱいだから外がいいよ」

2人は園内を歩きまわりながら、あちらこちらを絵本に出てくる場所に見立てながら、自分たちの地図を描いていきました。



気付きや経験した事柄

◆教師の意図
音声情報（読み聞かせ）だけではなく、視覚情報（探険地図）も提供する。遊びを豊かにしてほしい。

・環境の取り入れと、自分たちのイメージを共有

・おもしろかった物語を再現したい欲求（疑似体験）
・聞いたり、読んだりして得たイメージの実現

・平面図に表されたものを、立体的に再現しようとする力

・園内を物語の場所に想定する
・地図というもの（その果たす役割）への興味関心

7月

ぼくの作った砂時計は何分か教えて

時間の概念の理解

年齢：5歳児　場面：幼稚園　時期：7月

事　例　：22

ミキヤが嬉しそうに、ペットボトルを2つ組み合わせて中に砂を入れたものを持って担任に見せに来ました。

ミキヤ「先生、これ砂時計だよ」

担任　「本当だ。大きな砂時計だね。やって見せて」

ペットボトルの砂が落ちる様子を一緒に見た後、担任は実物の砂時計を持って来て逆さまにしました。

担任　「これは3分間を計る砂時計なのよ」

ミキヤ（じっと見ながら）「…3分ってすごく長いね」

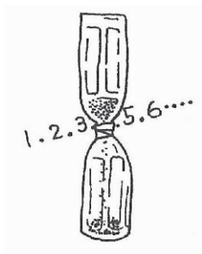
担任　「そうだね。3分って思ったより長いね」

ミキヤ「そうだ、ぼくの作った砂時計は何分か数えて」

担任　「いいよ。1、2、3…7、8。8秒だよ」

ミキヤ「そっか！これは8秒の砂時計なんだ」

ミキヤは嬉しそうにペットボトルの砂時計を友だちに見せにいき、「これは8秒の砂時計だよ」と伝えながら、やってみせました。ところが、ミキヤが「1、2、3…6」と数えたところで、砂時計の砂が落ちきってしまいました。ミキヤは「あれ？もう少し速く数えるのかな…」と言いながら、もう一度、繰り返し始めました。



気付きや経験した事柄

・目当て通りに工作を完成させた喜び
・過去に見た記憶を再現する力
（イメージする力）

◆教師の意図

実物の砂時計を観察することで、その機能や特性を理解してほしい。時間についても興味をもってほしい

・時間の長さの実感
・数（量）と時間の長さの関係
※時間を計るには、数を数えればいいことに気付く

・砂の落ちる速さと、数える速さとの関係性への気付き
※過去の経験（記憶されたイメージ）が、再度実物に出合うことで確かな知識として定着する

7月

そうさ、ヘラクレスオオカブトだよ

想像力・工夫する力

年齢：5歳児　場面：幼稚園保育室　時期：7月

事　例　：23

『ムシキング』の大好きなタイチが、「いいこと考えた！」と言って製作コーナーにやってきました。空のペットボトルとストローを取り出してきて、コーナーのテーブルの上で、はさみで切ってテープでつけ始めました。

担任　「もしかして、ムシキングの？」

タイチ「そうさ、ヘラクレスオオカブトだよ」

ところが、材料のストローを使いきってしまいます。

タイチ「もっとストローが欲しい」

担任　「ストローはもうないの。ストローの代わりに、何か他のものでできない？」

タイチはしばらく考えていましたが、「そうだ！これを使おう」と言って、牛乳パックを細く切り、足や角などのパーツを作っていきました。

気付きや経験した事柄

・自分の頭の中のイメージを、形に表現したいという欲求（好奇心）

・自分のイメージを理解されたことによる「有能感」「自信」

◆教師の意図

・与えるのではなく、自分で工夫してほしい
・他の教材の活用も広げたい

・イメージの実現に向けた、材料の工夫

7月

不思議！　だんだん染み込んでいく

色水が浸透していく不思議さ　同じ模様が数ヶ所できる不思議さとおもしろさ

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園　★時期：7月上旬

事　例　：24

　子どもたち数人が色のよく出る紙（通称ハタガミ）で色水を作っていました。担任は四角に切った障子紙を持ってきて、角がたくさんできるように小さく折り、そのうちの一角を色水に浸します。すぐに取り出しては次々に別の角を別の違う色に浸していきます。それをじっと見ていた幼児たちは「先生、何しているの？」「何になるの？」「いろいろな色になっちゃうの？」などそれぞれに言っています。黙ってじっと見ていたマサミは、

マサミ「先生、変だよ。だって、先生は先っぽの方しか付けていないのにだんだん上の方まで染みてくるよ」

担任　「本当だ。よく気が付いたね。不思議ね」

　他の幼児もじっと見ては「ほんとだ」と実感しています。全体に色が付くと担任は「そっと広げてみるね。どんなふうになっているかな」と言いながら広げます。様々な色が微妙に混ざり合い、きれいな色合いの染め紙が出来上がっていました。「わぁ、きれい」「やってみたい」と興味を示します。担任はポイントだけ注意してすぐに始められるようにします。

マサミ「私がしてもやっぱり段々上にくるよ」

サクラ「私も。どの色も、だよ」

　出来上がるとそっと広げ「えーっ！不思議。思ったのと違う」「色が混ざってきれい！」「こんなので洋服つくりたい」「虹色だよ」「あれっ！こことここ同じだ」「ほんとだ！同じとこが4つもあるよ」など思ったことを言い合い、「今度はどういうのができるかな」と期待しながら何回も試していました。

気付きや経験した事柄

◆教師の意図
・新しい活動の提示と毛細管現象など科学的な現象に出合い不思議さを感じてほしい
・偶然できる色合いのきれいさ、染め紙の特性などに気付いてほしい

・教師の動きに対する興味関心

・観察力
・不思議な現象への気付き

・他の幼児の気付きの確認

◆教師の意図
興味・関心の高まりへの期待

・自分でもやりたいという欲求

・不思議な現象の確認
・担任と同じ体験の確認

・担任と同じ現象に対する安心感
・推測（予測）とは違う驚き
・きれいさ、不思議さの体験
・同じ模様がいくつもできる発見

7月

洗濯機から出したら軽くなってた

物の重量の変化（水分の関係）

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園保育室・シャワー室　★時期：7月中旬

事　例　：25

　夏休み前の大掃除の時のこと、ミホはままごとコーナーのエプロンやスカートを1枚1枚もみ洗いしてバケツの中に入れていきます。それから脱水するためにバケツを持って、洗濯機まで一生懸命に運びました。思った以上に重いバケツに、小さな体が左右にふらつきます。担任に操作してもらい、脱水が終わった後、再び洗濯物をバケツに入れて持ち上げると、今度はあまりの軽さに驚いた様子でした。

　ミホは洗濯物を干しながら、担任に話しかけます。

ミホ「これ、とっても重かったのに、洗濯機から出したら、すごく軽くなっていたよ」

担任「へーぇ、そうなんだ。どこか違ってた？」

ミホ「ううん。同じものだよ」

担任「でも、ほら、もう絞っても水がでないよ」

ミホ「ホントだ。濡れてない。湿っているだけだ」

　ミホは衣服が濡れているときと脱水した後の重さの違いに、不思議さを感じているようでした。

気付きや経験した事柄

・布の状態の変化
・物の軽重の実感
・不思議さを感じる感性

◆教師の意図
変化とその理由に気付いてほしい

・変化の理由を考える
・濡れた物⇒乾燥、の気付き

7月

すごい！　水車が回った！

動力としての水の動き

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園テラス　＊時期：7月中旬

事　例　：26

担任はペットボトルや牛乳パック、道具などを集めると、ペットボトルの底を切り取り、ふたに穴を開けてビニール管を通し、そのビニール管を別のペットボトルにつなげていきます。ペットボトルの底を上にして、高い木の枝にぶら下げ、段々に低くしていきます。数人の幼児が担任の行動の意図がよく分からないながらも、ワクワクしながら集まってきて見ています。担任はポイントのところで言葉に出してやり方やコツをつぶやきます。最後に牛乳パックに切り込みを入れて水車を作り、それを一番低いペットボトルから出ている管の下に置きました。

担任「さあ、成功するかな。水がどう流れるかよく見ていてね。」

担任が最初の（1番上にある）ペットボトルに水を入れると、水は順々にペットボトルの管を通って最後に水車の羽に当たり、水車が回り始めました。

幼児「先生、すごい！水車が回った！」

担任「よし！成功。みんなもやってみる？」

幼児「やりたい！」

1人がペットボトルに水を入れると担任の時と同じように水車が回りました。「やったー！成功！」幼児たちは大喜びです。その後は、みんなで何回も水車を回して楽しみました。

気付きや経験した事柄

◆教師の意図
・新たなおもしろさに出合ってほしい
・水の勢いなどにも気付いてほしい

・カッター、目打ちなどの道具の使い方の習得
・教師の行動への興味
・仕掛けのおもしろさ

◆教師の意図
・新しい活動では成功してほしい
・おもしろさを十分体験してほしい

・水の流れのおもしろさ、不思議さ
・細い流れでも水車が回る驚き

・教師への尊敬と憧れ

・教師の温かい言葉、愛情の実感

・教師と同じことができる喜び
・成功の喜び
・友だちとの共通の喜び、一体感

9月

これ、日本の旗と模様は同じでも色が違う

国際理解　世界の国への興味と関心

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園保育室　＊時期：9月

事　例　：27

リョウ、タケシ、ヒサシの3人は、国ごとに国旗と国名、そして世界のどこにあるのかを記した絵本を広げて、頭をくっ付けるようにして見ています。

リョウ「これ、日本の旗と模様は同じでも、色が違う」

タケシ「バングラディシュ、って書いてあるね」

ヒサシ「これはケイレブ君（カナダ人のお友だち）の国の旗だね」

ヒサシ「この国はどこにあるのかな？」

リョウ（地図の1箇所を指差して）「ほら、ここだよ」

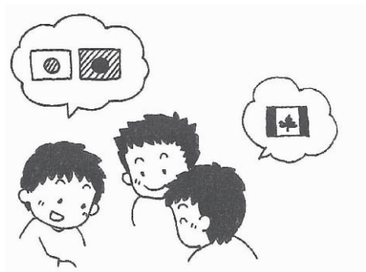
外国への興味が深まってきた3人は、さらに世界地図の本を持ってきて、ページをめくり始めました。地図に書かれている文字や、絵で紹介されているその国の文化・自然・産物などに関して、気が付いたことを互いに伝え合っています。

ヒサシ「アフリカには、ライオンやゾウがいるんだよ」

リョウ「氷で作った家がある。寒くないのかなー」

タケシ「スペインには、踊っている人がいるよ」

3人は夢中になって世界地図の本をめくります。



気付きや経験した事柄

・国旗のデザイン（色や模様）をきっかけに国旗に親しむ

・共通点と相違点の確認
・カタカナの読み

・探す楽しさ、見つける喜び

・興味関心の対象の広がり
（国旗から文化、自然などへ）

・自分が気付いた発見や、思いの表現
・知識の広がり
・想像する楽しさ
・異文化への関心と理解

9月

『お茶熱いですから気をつけて』って言うのはどう？

課題への積極的な取り組み（「敬老の集い」での役割の達成）

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園保育室・遊戯室　＊時期：9月

事　例　：28

園の伝統行事の「敬老の集い」では、年長児全員がお客様のおもてなしをします。それぞれ役割（係）を決め、練習することになりました。

お茶を運ぶ係になった子どもたちは、「温かいお茶を運んでもらうからね。急がなくて大丈夫だよ」という担任の話を真剣に聞いています。

レイ　「『はい、どうぞ』って、ゆっくりと言って渡そうかな」

ノゾミ「先生、『お茶熱いですから気をつけてください』って言うのはどう？」

担任　「それはいい考えね。そんな素敵な言葉があるとお客様はとっても嬉しい気持ちになるよ」

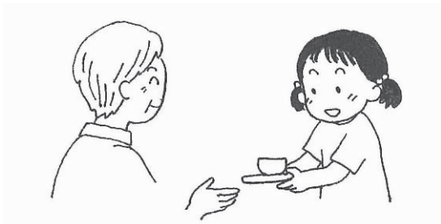
当日、子どもたちは急ぐように登園してきました。

（いよいよお客様が来園し、お茶を運ぶ直前）

ノゾミ（小さな声で）「先生、『お茶熱いから気をつけて飲んでください』って言うのはどう？」

担任　「うん。いい考えだね。きっとお客様は嬉しくなると思うよ」

ノゾミは慎重にお茶を運び、自分で考えたことを話しています。無事に運び終わってくると、安心した表情で担任に微笑み返してきました。お客様が帰った後、「あー、疲れた」と言いながらも、担任に「とってもお客様が喜んでいらっしゃったよ」と言われ、満足そうに顔を見合わせて笑っていました。



気付きや経験した事柄

◆教師の意図

・「おもてなし」を通して、相手の気持ちを考えて取り組むことや、自分の発した言葉が相手にどう受け止められるかを実際の場で経験してほしい
・相手を思いやった気持ちと行動を承認することで、次の行動からも自信をもって取り組ませたい

・お客様をもてなす気持ち
・自分なりに相手のことを考える

・一言添えることで、相手が嬉しい気持ちになることを知る

・努力が認められた喜び
・自己有能感（役に立った喜び）

・達成感、充実感
※相手を思いやった気持ちと行動を相手からきちんと承認される
↓
次からも自信をもって行動できる

9月

…じゃあ誰のハンカチなの

視野を広げて再考する（結果から前提条件を修正する）

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園保育室　＊時期：9月中旬

事　例　：29

アリサは保育室の前の廊下にハンカチが落ちているのを見つけたので、それを拾い上げると、「これは誰のですか？」とクラスのみんなに声をかけました。しかし、何度聞いても誰も返事をしません。落とし主が見つからずに困ったアリサは、仲よしのカズエに相談しました。

アリサ「どうしよう。誰も自分のって言わないよ」

カズエ「ハンカチ、あたしに貸して」

カズエはアリサからハンカチを受け取ると、クラスの一人ひとりに「誰の？」と聞いて歩き始めました。結局、クラス中の誰も落とし主ではありませんでした。

カズエ「誰も落としていないみたい」

アリサ「でも変だよ。じゃあ、誰のハンカチなの」

カズエ「…う～ん。あっ、ひょっとしたら…」

カズエとアリサはハンカチを持って、今度は隣のクラスに落とした人がいないか聞きに行きました。

↓

4歳児のクラスの子のもので、2人は喜ばれました。

気付きや経験した事柄

・落し物は落とし主に戻したい
・思いやり
・物を大切にする気持ち
・落とし主に戻す義務感
・解決のための試行と工夫

①一番効率的と思われる方法の試み
→全員に声をかける

②次に確実な方法に変換
→個別に訊ねて確認する

③別のクラスでの確認
（「自分のクラスの中に落とし主がいる」という最初の仮説を変更する）

10月

先生、ミサト、なわとび上手になったよ

プロセスの大切さ

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園園庭　★時期：10月

事　例　：30

ミサトの学級では、今、なわとびがちょっとしたブームになっています。始めは全然跳べなかったミサトも、お友だちと毎日練習をするうちに、少しずつ跳べる回数が増えて、それが嬉しくてたまりません。

ミサト「先生、ミサト、なわとび上手になったよ」

担任　「ホント？じゃあ、先生に見せて」

ミサト「うん。いいよ。そこでちゃんと数えていてね」

担任　「1、2、3、4、5、…」

ミサトは張り切って跳び始めたものの、5回で失敗してしまいました。

担任　「あっ～惜しい。足が引っかかっちゃったね」

ミサト「…」（無言）

担任　「すごいね。もう5回も続けて跳べるんだね」

ミサト「うん…、でも、ホントはもっと跳べるんだよ」

担任　「この間まで1回しか跳べなかったでしょ？」

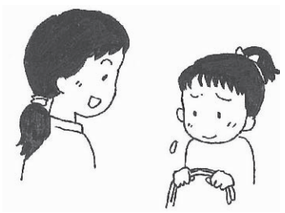
ミサト「うん。今は違うけど」

担任　「それってすごいよね。どんどん上手くなっているってことでしょ」

ミサト「うん！」

担任　「じゃあ、もう1回。今度は10回まで挑戦してみようか？」

ミサト「うん。今度はできると思うから、見ていてね、先生」



気付きや経験した事柄

・担任の承認への欲求

◆教師の意図
子どもの努力をきちんと受け止めた対応をしたい。努力を深め、一層意欲を高めたい。

・失敗の結果だけで評価しない大切さ

・頑張ったことの認め

・成果を示せなかった悔しさの共感

◆教師の意図
・結果もだが、努力している過程が大事なことを理解してほしい
・子どものレベルに合った次の目標の提示

・プロセスの大切さへの気付き
・積極的な挑戦心の誘発

10月

この位で遊んだほうがいいよ。間に合わなくなるもん

1日の生活の流れの理解　時間にかかわる感覚

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園遊戯室　★時期：10月

事　例　：31

保育室のホワイトボードには、幼児たちの今日の予定と集合時間が書いてあり、登園したら、自分の予定や集合時間を確認してから遊び始めるのが学級のルール（約束）になっていました。ある日、3人の男児が一緒に大型の積み木で遊ぶことになりました。

アキヒロ　「積み木で2階建ての基地を作ろうよ」

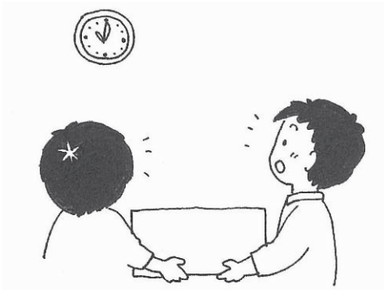
ヒロト　「大きいのがいいな」

ジュンペイ「いいよ」

ところが、作っている途中で、ジュンペイが何かに気付いて、声をあげました。

ジュンペイ「あっ！待って。あの時計の長い針が6になったら集合時間でしょ？今が12だから片付ける時間も入れると、あっちまで広げないで、この位で遊んだ方がいいよ。間に合わなくなるもん」

ヒロトとアキヒロも時計を見て、うなずきました。



気付きや経験した事柄

◆教師の意図
1日の流れを意識しながら、自分たちの遊びを展開してほしい

・2階建てという具体的な目的と、実現できる力の実感

・遊びの見通しと所要時間の理解
・時間の長さの理解

・自分たちの行動に要する大まかな時間の把握

・友達の提案の受け入れ（了解、了承し合える仲間関係）

10月

あれ！ 真っ黒。どうして？

機器の特性の理解

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園保育室　＊時期：10月上旬

事　例　：32

下旬に行われる誕生会でＯＨＰを使ったお話をすることになりました。サトシ、トオル、タカシ、リュウタ、シュンスケの5人はロケットに乗って宇宙探険をする話をすることにしました。担任に黒の画用紙をもらい、クレヨンでロケットや月、地球などいろいろな衛星や星を描き、勇んでＯＨＰの投影台にのせると、スクリーンは真っ暗になりました。

サトシ　「あれ！真っ黒。どうして？」

シュンスケ「ほんとだ！どうしてだ？」

トオル　「地球だってちゃんと青く描いたのに」

5人が裏返したり向きを変えたりしながら考えているところに担任が来て、

担任　「何か困っているみたいね」

園児たち　「うん、せっかく描いたのに真っ暗なの」

担任　「そうか、どうしてだろうね。ずっと前、人間を描いた時、目や口はどうしたか覚えてる？」

園児たち　「そうか！切り抜いて穴あけたんだ」

5人は映したいところをあけ始めました。担任はセロファン紙やカラーシートを提示し、切り抜いた部分に色が出るように援助しました。月や地球などがそれぞれの色に輝いて映り、5人は大喜びし、他の幼児たちにもＯＨＰの特性が伝わりました。

気付きや経験した事柄

・目的の共有

◆教師の意図
暗いから黒の画用紙と言ってきたが、自分たちでＯＨＰの特性に気付いてほしいのでその通りにする

・宇宙への興味関心
・宇宙は暗いという理解

・予想と異なる現象との出合い

◆教師の意図
経験の想起を図ることで、自分たちで気付いてほしい

・経験からの気付き

◆教師の意図
ＯＨＰならではの経験をしてほしい

・ＯＨＰの特性の理解
・光を通す美しさへの感動

10月

アキちゃんは速いからアキちゃんでどう？

友達の良さの発見　特性の理解

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園園庭　＊時期：10月上旬

事　例　：33

運動会が近づき、担任が今日は11時からみんなでリレーをすることを伝えました。10時20分ころになるとそれぞれが遊んでいたものを片付け、10時半を過ぎると、赤白両チームとも仲間を呼び集めて走る順番の相談を始めました。（1チーム15人ずつなので、15番までのゼッケンを用意してあります。）

担任が赤チームに1人欠席があることを伝えると、自分たちでも分かっているようで、誰が2回走るのがよいかをまず相談しています。

白チームはトップとアンカーを決めていますが、なかなか決まりません。リレーはトップとアンカーが決め手ということは、全体に浸透しているようです。

赤チームは、ソウタが2回走ることに決まり、1回目は4番目に走り、もう一度は11番目になり、まず11番のゼッケンを付けその上に4番を重ねて付けました。他の幼児もそれぞれ自分で番号を選んで付け並びます。担任が確認し、「11番がいないね」と言うと、「ソウタ君が2回走るから」と全員が理解していました。

赤チームのトップはクミに決まったのですがアンカーが決まりません。昨日は誰、その前は誰と言っていましたが、ヤヨイが「そういえば、アキちゃんの時勝ったよ。アキちゃん速いからアキちゃんでどう？」と提案すると、「そうだ、それでいい」「アキちゃん、お願い、頑張ってね」と全員一致で決まりました。

担任は「みんな友達のことよく見ているんだね。仲間の応援もしているし。この勝負は楽しみだね」と自分たちで決めたことを認め、期待を伝えました。

気付きや経験した事柄

◆教師の意図
・時間を伝えることで、自分たちで生活の流れを考えてほしい
・順番を決めたり自分が何番目に走るのか、チームのメンバーの認識など意識をもって取り組んでほしいから、ゼッケンを出す

・時間と活動の関係の理解と行動
・一人ひとりの意識の育ち
・活動への期待と意気込み
・人数合わせのための方法の理解

・活動の楽しさと特性の理解

・友達の特性の理解
・2回走る時の間隔の取り方
・2回分のゼッケンの操作

・欠番の理由の理解

・経験からの提案
・提案内容の理解、納得、了解
・チームとしての一体感

◆教師の意図
自分たちで課題解決ができたことと成長を伝えたい

10月 先生と一緒なら跳べるんだけどな

できないことへの挑戦・努力

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園園庭　＊時期：10月下旬

事　例　：34

　サトルはなわとびが跳べるようになりたくて何度も跳んでみるのですが、上手くタイミングがとれずに跳べません。担任に「1、2、3…」と掛け声をかけてもらいながら、みんなで跳ぶとできるのですが、1人だとできません。30回以上も跳べる他の子がうらやましくてしかたがありません。

サトル「先生と一緒なら跳べるんだけどな」

担任　「先生ともう一度してみる？」

サトル「うん」

　その後も毎日登園すると園庭の隅のほうでなわとびの練習をしました。上手くできないのはリズムとタイミングの取り方が悪いためだと気付いた担任は、縄を使わずに2人で手をつないで同じ場で同じリズムで上下の連続跳びをしたり、2人で縄だけを回したり、回っている縄の通り抜けをしたりなどもしてみました。そして数日後、

担任　「もう、1人でできると思うよ。やってごらん」

サトル「できた！5回跳べた！成功！」

担任　「数えてあげるね」

サトル「今度は10回も跳べたよ！」

　大喜びのサトルは、友だちの前で跳んで見せて、みんなにほめられて嬉しそうでした。それからは、友だちが跳べる30回を目指して、自分で数えながら毎日跳ぶ練習をしています。

気付きや経験した事柄

・上手くできないもどかしさ

・できる友だちをうらやむ気持ち

◆教師の意図
・目的を達成させてあげたい
・何とか努力が報われるように支援したい

◆教師の意図
課題の解決のためのアドバイス

・課題解決の具体的な方法の獲得
・目標に向かう努力
・担任と一緒の活動の楽しさ

・担任の励ましと期待
・努力の結果の確認
・成功の喜び
（努力が報われる実感）

・友だちの賞賛
・運動能力の伸長
・努力は報われるものという理解（確信）

11月 そうか！　もしかしてお風呂の時とおんなじ？

水位と物体の関係の気付き

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園保育室　＊時期：11月上旬

事　例　：35

　降園の時、担任はイソップ物語の『カラスと水差し』の絵本を読みました。

　＜話の内容＞歌うのが好きなカラスは歌いすぎてのどが渇き、水が飲みたくなりました。しかし、近くに川や湖などの水場がありません。水を探して飛んで行くと水の入った水差しがありました。ところが、水差しの口が狭いのと水が半分より下のほうにしか入っていないのでくちばしが届きません。しばらく考えたカラスは近くに落ちている石ころを何個も水差しの中に入れ始めました。カラスは水を飲むことができました。

幼児「どうして石をたくさん入れたら水が飲めたのかな？」

担任「どうしてだろうね。不思議だね」

幼児「分かった！石がぬれたら舐めればいい！」

担任「そうか。でも、石が出せるかな？」

幼児「うーん。だめだよね…」（首をひねっている）

タイチ「分かった！もしかして…。そうだ！お風呂の時とおんなじ？」

他の幼児「そういえば、ぼくもあった」

担任「ピンポン、ピンポン。よく分かったね」

タイチ「うん。だってさ、僕だけの時はこぼれないけどお父さんやお母さんと一緒に入るとお湯がこぼれるもん」

担任「そうだね。でもすごい！タイチくんよく気が付いたね」

　タイチは担任にほめられて嬉しそうでした。次の日、数人の幼児が自分たちで絵本を見始め、カラスが石を入れ始めたところからは、ゆっくりめくっていました。

気付きや経験した事柄

◆教師の意図
・知恵を働かすことの大切さ
・水の性質に気付いてほしい

・自分の考えとの不条理を感じる

・自分なりの考え

◆教師の意図
誰かが気付いてほしい

・可能性の推察
・経験した現象との結びつけ

・水に物を入れると溢れるという原理の気付きと理解

◆教師の意図
幼児の気付きの受け入れと十分な承認、賞賛

・自分の発見の確認と有能感の実感

11月

綱引きをしたいけど

数の均等・量の均等

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園園庭　＊時期：11月上旬

事　例　：36

幼児たちは「綱引き」をしたくなり、綱を用意して、赤と白のチームに分かれたところで、赤チームのマサキが、白チームのヤスマサに声をかけました。

マサキ　「そっちのチームは何人いるの？」

ヤスマサ「8人。そっちのチームは？」

マサキ　「7人。こっちは1人少ないから損だよ。

そっちは誰かひとり応援する人になって」

ヤスマサ「そっちに誰かもう1人入ればいいじゃん」

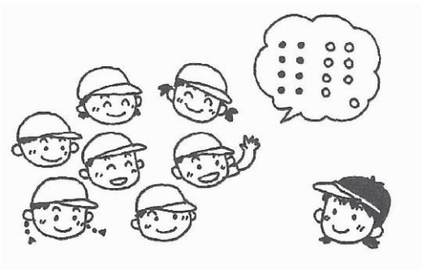
マサキ　「でも誰もいないよ」

（誰も抜けたがらないので、みんなが困っていると）

タカマサ「そうだ、先生に入ってもらおうよ！」

幼児たち「それがいい」

言い出したタカマサが先生を呼びに行き、1人少ない赤チームに入ってもらいました。両チームが無事、同人数になったことで全員が納得し、やっと「綱引き」が始まりました。



気付きや経験した事柄

・数を数える
・数の比較（人数の違いの理解）
・1対1対応の概念
・意見を出し合う
・調整の必要性

・解決のための方法を思いつく
・友だち（他者）の考えを理解し、認める

・人数の差の不合理には気付く
※人数が合えば、力や質の違い（大人と子どもの力の差）までは問題点としていない

11月

人間の分けっこだね。算数の勉強みたい

数の集合と分散　状況の判断

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園園庭　＊11月中旬

事　例　：37

クラス全員で鬼ごっこをすることにし、「子ふやし鬼」のルールを説明します。

担任　「今日の鬼ごっこは少し難しいです」

幼児　「えっ！どんなの？楽しみ！」

ルールは、鬼は始め1人で追いかけ、捕まえたらその人と手をつなぐ。2人で捕まっていない人を追いかけ、捕まえたらまた手をつなぐ。4人になったら2人ずつに分かれて、全員捕まったら終わりになります。

サヤカが初め鬼になり、タエ、カオルの順に捕まえました。次にケンジを捕まえ4人になりました。

サヤカ　「4人になったからそこで手を離して」

カオル　「えっ！どうして」

タエ　「だって4人になったじゃない」

サヤカ　「4人になったら2人と2人になるんだよ」

カオル　「あ、そうだった。じゃあ、あたしとケンくんになればいい？」

ケンジ　「カオルちゃん、早く行こう」

その後、何組かで同じような状況が見られましたが、1回戦の終わるころには全員理解できました。

カオル　「この鬼ごっこおもしろいね。初めちょっと難しかったけど」

サヤカ　「うん、人間の分けっこだね。算数の勉強みたい」

幼児たち「先生、もう1回やりたい！」

その後、しばらくの間繰り返され、分かれるのも早くなりスムーズに展開されていました。

気付きや経験した事柄

◆教師の意図
・数に興味をもってほしい
・数の集合と分解についても知ってほしい

・教師の話の理解と実践

・相手の理解が得られる説明（納得）

・きっかけによる想起と解決策

・繰り返しの効果
・遊びのおもしろさと特性の理解

・数の集合と分解の理解

・具体的な数の操作の体験

12月

1つ残ったから最後は6個にしよう

日常生活の中にある危険の防止　部屋をきちんと片付ける習慣

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園遊戯室　★時期：12月

事　例　：38

遊戯室で絵を描き終わり、自分の使ったイスを片付けようとしていたアリサは、部屋の中のイスが高く積み上げられているのを見て、「危ないね」と言います。その言葉を聞いたカズエとショウコも、「本当だ。危ないね」と同意し、3人でイスを片付けることにしました。

全部で80脚以上はありそうなイスの山を、普段、保育室でしているように、5脚ずつに重ねて、きれいに並べて片付けていきます。ところが、5脚ずつ重ねていったところ、最後にイスが1脚残ってしまいました。カズエが「もう一度、数えよう」と言い、3人は重ねたイスをもう一度数えて、ちゃんと5脚ずつになっているか確認しました。

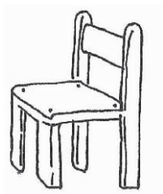
カズエ　「やっぱり、全部5つずつあったね」

ショウコ「…どうする？」

アリサ　「最後は6個にしよう」

ショウコ「うん、そうしよう」

アリサは最後の組だけは5脚ではなく、6脚のイスで1組にすると、「先生、1つ残ったから、最後は6個にしたよ」と担任に伝えにきました。



気付きや経験した事柄

・安全性（危険性）への感性
・自発的な「善意」の行動
・社会性の目覚め
※「気が付いた以上、放置しない」という（幼児なりの）義務感

・生活体験から得た知恵の活用
大きい数（80以上）は、分割・整理して対応
・5でまとめる必要性の理解と活用
・予想通りにいかないときの、解決のための思考

・自分の考えを相手に伝える

・友だちの考えを認める

・臨機応変の対応
・自分の行動の連絡・報告

12月

歌いながら鳴らしたら気持ちがそろうかな？

協調性の涵養　音がそろう心地よさ

★年齢：5歳児　★場面：幼稚園保育室　★時期：12月

事　例　：39

ハンドベルに興味をもった幼児たちが、そばにあった「きらきら星」の楽譜を見ながら音を鳴らしています。ユウヤは「こんなの簡単だよ」と得意げですが、ときどきヨシマサが忘れていたり、分からずに音を鳴らさなかったりすると、「ちゃんと鳴らしてよ！」「間違うなよ！」などと文句を言います。

担任がその様子を見て、「きれいな音色ね。何か1曲聴かせて」と言うと、子どもたちは得意げに「きらきら星」を演奏し始めました。

ところが、ユウヤの鳴らし方が速く、4人の音がばらばらで、曲にはなりません。途中からユウヤは他の子に「もっと速く」「遅いよ」と言い出しました。

担任　「みんなの気持ちがそろうともっと素敵な音になるはずだよ」

ユウヤ「歌いながら鳴らしたら気持ちがそろうかな…。どのくらいの速さで歌えばいいのかな…」

やがて歌の歌詞を声に出しながら、ハンドベルを鳴らし始めると、今度はフレーズがつながり、幼児たちの耳にも「きらきら星」の曲に聞こえました。4人は「おー、すごい」と口々に叫び、ユウヤも「できたー」と嬉しそうです。

気付きや経験した事柄

・楽器や音階への興味
・ハンドベルの音色の美しさ
・楽譜の字を読む（文字への関心）
・自己有能感から生まれる他者の否定

◆教師の意図
相手の音を聴きながら、自分の音を鳴らすことで、曲として成立することに気付いてほしい
（気持ちを合わせることの大切さ）

・協調性の必要感
・協調する方法の工夫、習得

・音が合う心地よさ
※協調して成し遂げることの喜び

12月

やっと冬が来たんじゃない

自然現象の体験（竜巻、落ち葉、季節感）　季節の変化

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園園庭　＊時期：12月

事　例　：40

北風の吹く寒い日。風で落ち葉が舞い上がる様子を見ながら、コウキとゲンタが話をしています。

コウキ「あっ、竜巻だよ」

ゲンタ「どうしてあの木の下だけなるのかな？」

別の場所で落ち葉を集めてきたアンナとアイコはそれを担任に見せに来ました。

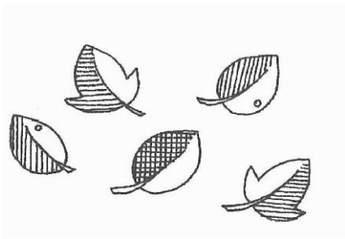
アンナ「とてもきれいな色の葉っぱがあったよ」

アイコ「赤色で、裏は黄色の葉っぱなの」

担任　「ホントね。きれいな色ね」

アンナ「冬になると、葉っぱもお化粧するんだね」

その後、お弁当を食べながらみんなで竜巻のことや、葉っぱの色のことを話題にしました。すると、ミキが「やっと冬が来たんじゃない」と言いました。



気付きや経験した事柄

・1ヶ所だけに風がまわる不思議

◆教師の意図

自然現象を正しく（難しく）説明し、理解させるより、子どもと一緒に不思議さを楽しむ

・落ち葉の色の美しさへの感動
・一緒に感動を共有する
・季節の変化への気付き

2月

お母さんザリガニと同じ形だ！

生き物の観察　生命の誕生の喜び　ザリガニの特性の理解

＊年齢：5歳児　＊場面：幼稚園保育室　＊時期：2月

事　例　：41

クラスで飼育しているザリガニが産卵しました。お腹に卵をいっぱいつけたザリガニに、子どもたちはとても興味をもって、毎日、長い間、水槽をのぞいていました。

タイチ「（卵は）どうやってくっついているのかな？」

ヨウコ「あの中にザリガニの赤ちゃんがいるんだね」

タイチ「あれ、だんだん卵の形が変わってきたよ」

ある日、数匹が孵化し、水槽の中で跳ねていました。

タイチ「うわー！赤ちゃんになったんだね」

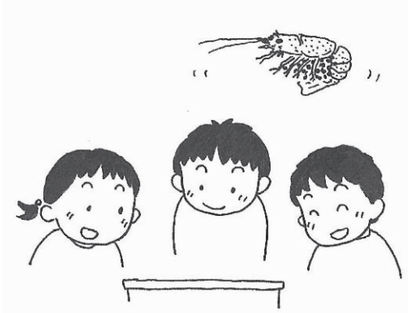
ヨウコ「すごく小さいね」

タイチ「でも、お母さんザリガニと同じ形だ」

ヨウコ「忘れずに、ちゃんとエサをあげないとね」

タイチ「そうしたら、きっと大きくなるよね」

その後もザリガニはどんどん孵化し、水槽はにぎやかになりました。子どもたちは金魚のエサや乾燥イトミミズなどをあげながら、小さなザリガニがエサを食べる様子を楽しそうに見ていました。



気付きや経験した事柄

・生き物への興味関心
・生き物の生態の観察
・実物（本物）を間近に見る

・特徴の理解

・自分で気付いたことを発言する

・生物（命）の誕生の喜び

・成体と幼体の形態の比較

・生き物の成長への期待と予測

2月

今の上手だったよ

自分の役割の意識・責任感　アンサンブルの楽しさ　仲間への思いやり

年齢：5歳児　場面：幼稚園保育室　時期：2月

事　例　：42

5歳児の「はと組」では楽しみながら発表会の合奏ができるよう、いろいろな楽器を遊びのコーナーに出しました。幼児たちはすぐに興味を示し、それぞれ楽器を手にしては、いろいろ音を出して楽しみ始めます。

担任が学級で合奏しようと考えている曲をかけ、カスタネットを鳴らすと、幼児たちは簡単なリズムをすぐに覚え、同じように鳴らします。次にタンバリンを鳴らしてみると、これもすぐに覚えました。やがて、興味をもった幼児たちが集まり、楽器を分担して、合奏をする姿が連日のように見られました。木琴やハンドベルの音程が違うと、「なんか変だよね」「嫌な音がする」などと言い、人数が足りないと1人で複数の種類の楽器を受け持つ子もいました。

発表会で木琴担当になったアツシは自分で毎日練習していましたが、なかなか上手くいきません。同じ木琴担当のマサルとヤエが一緒に打ちながら、「こうだよ」とやって見せたり、「今の上手だったよ」と励ましたりしていました。

当日は少し緊張しての合奏でしたが、たくさんの拍手をもらい、どの幼児も嬉しさいっぱいの様子でした。「ちょっと間違えちゃった」というアツシも、役割を果たした満足感を味わえたようでした。

気付きや経験した事柄

◆教師の意図
子ども自身の興味関心を優先する
（複数の選択肢から自分で選ぶ）

・見たり聞いたりして再現する力
・リズムにのる楽しさ

・視覚、聴覚から情報を取り入れ、その差異を判断する（聴き分ける）

・自分の役割を果たすための努力
・自発的に自習する姿勢（協働性）
・自分の目標をもって取り組む（挑戦する）
・自分ができることを友だちに教えてサポートする

・達成感、満足感の実感（体験）

2月

どっちも凍らない。なんで？

考えの実験（予測と結果）　条件によって結果が異なることの理解

年齢：5歳児　場面：幼稚園園庭　時期：2月上旬

事　例　：43

朝、ヒカルが登園する途中の公園の水溜りが凍っていたと言って薄い氷を持って登園してきました。みんなで触っては「冷たいね」と言い合っていましたが、ついに溶けてしまいました。自分たちも凍らせてみたいということになりました。「寒くなければできないこと」や「水が必要なこと」は分かっているのですが、まず、担任に相談します。担任は「気温が低くないとできないこと」「日陰でなければできないこと」の理解の状況を確認しました。天気予報で調べた結果、「今晩は冷え込みが厳しい」とのことだったので実験することになりました。

・サユリたちはプリンのカップとビンに水を入れて北側の風の通り抜けている土の上に直接置きました。

・アキヒサたちは真水を入れたビンと不透明絵の具で作った色水入りのビンをサユリたちのとなりに並べました。

・カナコたちはサユリたちとまったく同じものを用意して北側のテラスの上に置きました。

翌朝、登園すると早速見に行きました。

・サユリたち　「ビンは凍ったけどカップは凍っていない。どうしてだろう」

・アキヒサたち「色水はだめだった。不思議」

・カナコたち　「どっちも凍らない。なんで？」

担任はそれぞれがいろいろ予想し工夫して置いたことを認め、できなかったことの残念さやつまらなさを受け止めた上で、プラスチックとガラスでは冷え方が違うこと、真水と色水でも違うこと、特に不透明絵の具は凍らないこと、そして、地面に直接置いたときとテラスでは冷え方が異なることなどを説明しました。

2回目は全員のものが凍りました。

気付きや経験した事柄

・寒さの体感
・氷の性質
・興味の追究

・現象が起きる条件の概況理解

◆教師の意図
冬ならではの経験をしてほしい。折角やる気になっているので実現させたい。失敗もいいかなと思い準備については見守る

・凍ることの理解と期待
・どんな水でも凍るという予測
・色つきの氷を作るという目当て
・地面より高いほうがよいという意識
・季節感
・成功と失敗の体験
・期待と異なる結果との出合い
・挫折の体験
・同じ気象状況でも場所によって温度などの条件差が生じることとの出合い

◆教師の意図
・氷の特性と現象を理解してほしい
・失敗を次に生かしてほしい

・自然現象の不思議さと理解